

巻頭言

本学会がアプライド・セラピューティクス学会と命名された理由は、その目的が実際の患者における最善の薬物治療を病態生理、薬物動態、製剤学、薬理学、毒物学、患者の心理学を学際的に統合して作り上げるという方法論を生み出した Lloyd Yee Young と Mary Anne Koda Kimble 編集の Applied Therapeutics を学んだ薬剤師、医師らが日本においてもこの思想を定着させんとして発足させたものであった。学会の年会も第二回までが成功裡に終了し、学会誌も順調な刊行が進んでいるのは慶賀すべきことである。

一方で、本学会の理念が臨床の場への速やかに浸透しているかと言うと、臨床薬学の重要性が総論としては広く認められているのに反して、個別論では薬剤師がベッドサイドで薬物治療に参画するという面での進展が進捗していないと考える私だけではないだろう。

来春から6年間の薬剤師教育を終えた学生が医療の場に出て行くことを考えると、この問題は深く考慮すべき問題である。突き詰めて考えると、この問題は薬剤師自身があるべき自己職能像をどのように認識しているかの問いかけである。私自身は、6年生薬学教育を受けた薬剤師は臨床薬剤師であって欲しいし、その中心的な業務は薬物治療の選択と評価・修正への参加であって欲しい。必ずしも、全ての薬剤師活動が米国に範をとる必要はないが、米国の臨床薬剤師活動の発足から現在までの歴史とその成果は我が国の薬剤師が深く参考にすべきものがある。これまでに、少数ではあるが米国などの臨床薬剤師先進国で薬剤師免許を取得したり、PharmD などの学位を取得した日本人薬剤師の方々はいるものの、帰国後の活躍の場には必ずしも恵まれていない。

本学会の構成員の医療機関ではそのような人材を積極的に雇用し、臨床活動の活性化を図ることが本学会の発展にも大きく寄与するのではなかろうか。

明治薬科大学 薬物治療学
越前 宏俊